

現代風俗によみがえる古典の美

立原正秋展



写真提供：新潮社写真部

新潮社記念文学館特別展

平成二十一年四月二十五日(土)～六月五日(金)

主催 仙北市・仙北市教育委員会
協力 県立神奈川近代文学館
財団法人神奈川文学振興会
財団法人日本近代文学館
(株)新潮社
後援 秋田魁新報社
角館図書館後援会

開館時間/午前9時-午後5時※入館は閉館30分前まで
会期中は休館日なし
観覧料/大人(高校生以上)300円、小人(小中生)150円
20名以上団体割引有
問い合わせ/秋田県仙北市角館町田町上丁23
新潮社記念文学館(仙北市総合情報センター内)
TEL 0187-43-3333





立原正秋



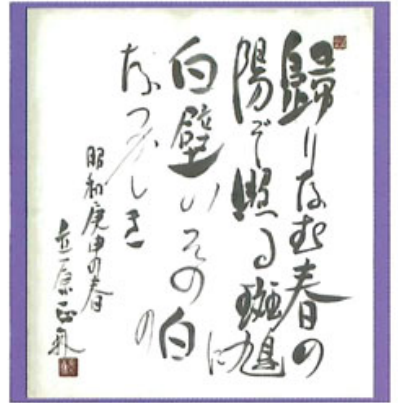
上：韓国の生家



上右：1945年自宅にて



下：同人誌「扉」創刊を祝して



高井有一蔵「形見の書」

左：早稲田大学「文学部

入学の春」1946年4月

「立原正秋展」開催に当たって

立原正秋は一九二六年、韓国の農村に生まれ、一九八〇年、東京で死んだ。小説「白い罌粟」により直木賞を受けたのは、一九六六年であった。あたかも日本経済が高度成長にさしかかった時期である。

このころの世相と、立原正秋の文学とを切り離して考える事はできない。三度の食事に美味佳肴を欠かさず、高価な泥大島の着物を好んで身に着けた彼の生活振り、それを反映した色彩鮮やかな小説は、上り坂の社会にあつて、更に豊かさを求める人々を惹き付けた。

自分の本来の志は、あくまでも芸術性の高い純文学の創造にあるが、それ以前に、大勢の読者を愉しませる大衆小説を決して排除はしない、二刀流を使つてみせると彼は豪語して憚らなかつた。

純文学を目指す作品の場合は世阿弥の「風姿花伝」を小説作法の Handbook とし、日常生活のなかに美を求めて生きる人々の姿を描いた。京都や奈良、鎌倉と伝統ある土地を舞台として交わされる男女のやりとりは、時にこの世のものではない気配を漂わせるが、それが荒唐無稽に陥らないのは、作者自身の美を求める心が、それだけ切実だったからであろう。

立原正秋が逝つてすでに三十年に近い歳月が過ぎた。高度経済成長ははるかな昔になったが、華やかな時代に華やかな作家が遺した営みの数々からは、現在の社会が閉塞して暗いだけにまだ多くの酌むべきものがあるだろう。

この展覧会の開催に当り、数多くの遺品の展示を許可して下さった立原光代夫人、また企画段階から万般にわたる協力を惜しまなかつた県立神奈川近代文学館、日本近代文学館のスタッフの方たちに心からお礼申し上げます。

新潮社記念文学館名誉館長 高井有一



高井有一



立原正秋と高井有一

1975年（昭和50）

左は1991年発表の
評伝「立原正秋」の原稿。